OPINIONS

政権交代とアベノミクスに思う

熊本大学大学院
生命科学研究部消化器外科学
馬場 秀夫

わが国は、政治・経済・教育・外交などいずれの分野においても世界の中でその存在感が薄れ、日本人自身が自信を失いつつある状況が長く続いてきた。特に経済の分野ではバブル崩壊後の失われた20年が歴然として存在し、その後のリーマンショックやギリシャ危機に端を発した円高がわが国の輸出産業に大きな痛手となった。しかし、最近、アベノミクスによって、にわかに日本の経済状況が変わりつつあることは大いに注目に値する。昨年末の政権交代と第二次安倍内閣以降のわが国の状況を振り返り、最近、感じていること記させていただきたいと思う。

平成24年12月16日に施行された衆院選の結果、自民党が249議席、公明党と合わせて325議席を確保し、議員定数の３分の２に届き、大勝した。一方の民主党は、改選前の４分の１の57議席、維新の会が54議席となり、政権交代することとなった。

３年３ヵ月前、国民の圧倒的な支持を受けて政権交代を実現させた民主党。当初、70%を誇っていた内閣支持率は選挙前、10%台にまで下落し、結果として大敗を喫した。民主党が掲げたマニフェストは子ども手当てや高校授業料無償化など、一部は実行されたが、国民が望んだ無駄遣いの排除や政治主導による国家運営など多くが実現しないままに終わることとなった。事業仕分けは注目されたが、次世代スーパーコンピュータの研究開発予算を削減するため、蓮舫議員の「世界一ではなく、二位じゃダメなんでしょうか？」という発言は、世界のトップを目指し、日夜努力している研究者・科学者ひいてはスポーツ選手やさまざまな企業に対して、意欲を失わせる結果となった。

当時国民があれほど期待した政権交代はことごとく裏切られる結果となり、また、待望された二大政党制は根付かず、いま小政党が乱立する結果となったのはなぜなのか？　恐らく、一言で言えば、民主党には国民が期待していたような政権を切り盛りする力量や経験がなく、また、政権を担えるだけの人材が不足していたためだろう。鳩山首相の軽々しい発言と迷走、菅内閣の危機管理能力の低さ、野田内閣の消費税増税というマニフェスト違反など、次々と国民の期待を裏切る結果となった。さらには、もともと選挙に勝つためという目的のために集まった寄り合い所帯が随所で綻びをみせ、まとまることができずに離党者が相次いで出たことによるのだろう。

一方で、再び政権与党となった自民党の安倍首相の下、アベノミクスという経済再生の施策が進んでいる。アベノミクスは、安倍首相が第二次安倍内閣において掲げた一連の経済政策に対して与えられた通称であり、安倍とエコノミクスを合わせた造語である。これは、ロナルド・レーガンの経済政策であるレーガノミクスにちなんで、アベノミクスと呼ばれるようになったといわれている。このアベノミクスは、大胆な金融政策、機動的な財政政策、民間投資を喚起する成長戦略の３つを基本方針としており、安倍首相は「３本の矢」と表現している。具体的には、２%のインフレ目標、円高の是正、政策金利のマイナス化、無制限の量的緩和、大規模な公共投資

(国土強靱化)、日本銀行法改正などが挙げられている。アベノミクスの言葉とともにデフレからの脱却が可能になるかもしれないとの期待感から、具体的な施策が実施される前にもかかわらず円安・株高現象が起こりはじめた。

民主党政権において数回の円売りドル買い介入をしたものの、結果として円高は改善されず、貿易赤字は毎月膨張し続けた。そして、輸出産業、とりわけ家電メーカーは、シャープ、パナソニックなど、ことごとく危機的状況に陥ることとなった。安倍首相が、デフレ脱却・無制限の量的緩和策を打ち出したことで、現在日経平均株価が上昇し、円安の動きが連動して起こっている。円安になると輸出競争力が付き、為替差益が生ずるため、実際に増収増益となる。そのため、マーケットが敏感に反応し、第二次安倍内閣の発足と同時に市場が動いて経済的にプラス効果が出はじめたのだろう。２月１日現在、日経平均は12週連続で上昇し、「岩戸景気」の1958年12月～1959年４月にかけての17週連続に次ぐ54年ぶりの記録となっている。

この間の一連の流れを見ると、国家のリーダーが明確な数値目標を設定するとともに、国を挙げて目指すべき方向性を示すことがいかに重要であるかがわかる。また、言動がブレず、スピードを持って実行し、国民に明るい将来展望を示すことで実質的にまだ何も変わってなくても、人々の心は期待に胸ふくらみ、物事が変化することを如実に示したのではないかと思う。

翻って、わが教室運営を考えると、外科教室を主宰する立場となって、はや８年の月日が経過したが、アベノミクスに代表されるような明確な目標設定を行い、教室員ならびに関連病院の先生方に外科の将来は明るいと夢を持たせることができているであろうか？　外科医不足が続き、外科手術が高度化するとともにriskと一人あたりの負担が増え、一方で給与等には十分反映されていない現状から、精神的・身体的に疲れている外科医も多くいるのではないかと思う。

常に臨床・研究・教育のいずれにおいても“一流”を目指したいと言いながらも、あまりに漠然とした目標設定であり、今、自分たちが果たしてどの方向に向かっているか、客観的に判断ができていないのではないかと反省する気持ちである。

今回の政権交代の例にならって、もう少し具体的な目標設定とスピーディーな取り組み、官僚を活かすやり方、すなわち教室員一人ひとりに活躍の場を与えて、本人たちの持てる実力を十分に引き出すことで成功体験をさせ、明るい夢のある将来を感じさせる教室運営を心掛けたいと切に思う今日この頃である。

(本文は本年の同門会誌に寄稿した文を一部改変しています。)